

樹木と絵画の交差点

第8回 ～菱田春草とアジサイ～



カシワの幹の上で眼光鋭くこちらを見つめる黒い猫。菱田春草（1874-1911）の「黒き猫」（左図）は、静かな一瞬の空気感を捉えた、明治期日本画の傑作です。後に記念切手にもなったので（1979年）、ご存知の方も多いでしょう。

春草が活動した明治中期～後期は、画壇にも急激な文明開化の波が押し寄せました。画家たちは伝統的な日本画の表現と西洋的な空間・テーマ表現のほごまで試行を続けました。春草はわずか36歳で早世しますが、その作品は同時代の芸術家たちに鮮烈な印象を残しました。

菱田春草（1874-1911）

「黒き猫」（部分）（1910年） 永青文庫蔵（熊本県立美術館委託）重要文化財
明治近代日本画の草創期を築いた夭折の画家。

「西洋画のように写生にも偏せず、日本画のように理想にも偏しない画を描いてみたい」と語った。

七色に移ろう花色

明治28年(1895年)に東京美術学校（現・東京藝術大学）を卒業した春草は、将来を囑望される気鋭の画家でした。新時代明治にふさわしい絵画として何を描くべきか？その答えのひとつとして春草がアジサイを選んだのは興味深いことです。江戸時代～昭和の初め頃まで、アジサイはあまり人々に顧みられることのない花でした。恐らく「陰のイメージ」が強かったのでしょう。日本の自生の花であるのになんとともつれないことですが、ともあれ春草は従来の華やかで優雅な日本画とは違う新しいイメージをアジサイに託して描きました。



水鏡（1897年）

東京藝術大学大学美術館蔵

天平美人を思わせる女性とアジサイ。赤から青へと花色を変えるアジサイのグラデーションが女性の衣装の色と対応しています。咲き終わっても枯れたようにして花が残るアジサイと、美しく生命感に満ちた美女が水面には濁った像として映し出され、はかなく色あせていく生命が重ね合わせられています。春草の発想の鋭さが独特の情感を生んでいる作品です。

春草はこの絵について、「紫陽花は七色にも変わるという事で、赤から紫にそれから終りには空色になって枯れてしまう、紫陽花を天女にかたどって添物にしたのです。色の配合も幾色もあるように其の調子で天女をも描き～中略～天女の色を取合せつまり紫陽花から取ったのです」と語っています。（「画界新彩」早稲田文学 1898年）
安田靫彦をはじめ当時の若い画家は、この作品が持つ新しい感覚に強い感銘を受けたといわれます。



紫陽花（1902年） 足立美術館蔵

この時期、春草は輪郭線を描かない新しい描法（^{もうろうたい}朦朧体）を試みていました。当時の絵は輪郭線で描くことが欠かせなかったため、春草らが描いた朦朧体の作品は猛烈な批判を浴びました。アジサイの背景はほとんどなにも描かれないままで、朦朧体の技法と相まって幻想的な効果をもたらし、画面は静かな優しい抒情に満たされています。

この絵が描かれた明治末期には、西洋で改良品種されたアジサイ（セイヨウアジサイ）はまだ日本に入ってきていませんでした。描かれているのは日本の自生種のアジサイと思われます。葉や花の形が華奢に描かれていることから、アジサイ（ホンアジサイ）（*Hydrangea macrophylla* var. *macrophylla*）よりも花が優美なヒメアジサイ（*Hydrangea serrata* subsp. *yezoensis* f. *cuspidata*）のようにも見えます。ヒメアジサイは花房が平らでつぶれたような形、葉に光沢がなく薄いなどの特徴があります。アジサイの名所として知られる神奈川県鎌倉市の明月院、千葉県松戸市の本土寺にはヒメアジサイが多く植わっています。

アジサイについて



本土寺のアジサイ
撮影場所：本土寺（千葉県松戸市）

日本には多くのアジサイが自生しています。ガクアジサイ（*Hydrangea macrophylla* var. *normalis*）、ヤマアジサイ（*Hydrangea serrata*）の原産地はもともと日本で、やがて台湾や中国へ、18世紀から20世紀にかけてはヨーロッパやアメリカへと渡っていきました。古くは万葉集に詠まれ、桃山時代には能装束の文様にもなりましたが、一般的にはほとんど関心を持たれなかったようです。その理由はアジサイの持つ特性に因ります。日陰を好んで生育すること、花がいつまでも残るのは潔くないと思われたこと、葉に毒性があること^{※注1}、萼片が

4枚で縁起が悪いことなどから江戸時代には“幽霊花”と呼ばれて、あまり良くないイメージだったようです。死者に手向けられる花として、寺にはしばしばアジサイが植えられました。花鳥風月調の絵画に形式的に描かれた、ツバキやボタンとは対照的です。

一方、18世紀末のヨーロッパではアジサイが「東洋のバラ」として人気を博し、育種や品種改良が進んでいきました。大正時代に日本に逆輸入され、華やかなセイヨウアジサイがやってきたのち、戦後に本格的な輸入が始まりました。現在のアジサイ人気はご存知の通りです。

梅雨の曇りがちな気候の中で凜と咲くアジサイは、私たちの心を励まし元気づけてくれます。2013年4月、東日本大震災で決壊した福島県須賀川市の藤沼ダム^{※注2}の湖底でヤマアジサイの群生が見つかりました（『奇跡のアジサイ』）。そのニュースは、住民をはじめ被災地を応援する人々の心に明るい気持ちを灯しました。

アジサイは別名「七変化」とも呼ばれ、花言葉は「移り気」です。その呼び名の通り、育った土壤のpH（酸性度）によってアジサイが花色を変えることはよく知られています。酸性土壤が強いと青く、アルカリ性土壤が強いと赤く発色するといわれています。日本の弱酸性の土壤では青色になることが多いですが、都会のコンクリートに囲まれた場所では土壤がアルカリ性に傾いて赤～赤紫色になることがあります。一方、ヤマアジサイ“桃色沢”（*Hydrangea serrata Momoiro-sawa*）など土壤pHに左右されない品種も知られています。

注1

「自然毒のリスクプロファイル：高等植物：アジサイ」厚生労働省 ホームページ（参照 2022-7-16）

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000082116.html>

注2

2017年1月に藤沼ダムの復旧工事完了

《参考文献》

河北倫明、平山郁夫監修「菱田春草 こころの秋」学習研究社 1994年（巨匠の日本画 [4]）

尾崎正明監修 鶴見香織著「もっと知りたい菱田春草－生涯と作品」東京美術 2013年（アート・ビギナーズ・コレクション）

川原田邦彦、三上常夫、若林芳樹著「日本のアジサイ図鑑」柏書房 2010年

コリン マレー著 大場秀章、太田哲英訳「アジサイ図鑑」アポック社 2009年

川原田邦彦著「NHK 趣味の園芸 よくわかる栽培 12か月 アジサイ」日本放送出版協会 2007年

「決壊ダム底で生きた株育て、「奇跡のあじさい」植樹 全国に栽培の輪、あす須賀川で 1000人集う」毎日新聞 記事（2017年6月24日 地方版）